

# 去勢恐怖の有無

## ——男根表象の日欧比較——

松本 伊瑛子

### I. 西欧男性の主体形成

1856年にオーストリアに生まれた精神分析の創始者フロイトは、20世紀の大発見の一つといわれている無意識という領域を発見した。無意識という、本人は意識していないけれども日常の精神活動に影響を与えている領域があって、例えばここには抑圧された性欲衝動があり、この性欲衝動（リビドー）の働きによって、人間の心の動きが決められると考えたのである。つまり、性欲というものは、人間を行動に駆り立てる心の内なる大きな力の一つだということである。そしてフロイトは、中でも特に男性の無意識に、去勢恐怖があり、それが心を駆り立てる大きな力になっていると考えた。

去勢とは本来はオスの精巣を除去することだが、フロイトが去勢恐怖というときの去勢は、精巣というよりペニスを切り取るという意味で使われている。ペニスを切断されるかもしれないという恐怖心を無意識に抱いている西欧人男性と、そういう男性が形成してきた西欧世界のあり方を、エレヌ・シクスーが批判している。エレヌ・シクスーは1937年に当時フランスの植民地であったアルジェリアで生まれたユダヤ系女性である。女性であるための差別や、ユダヤ人であることの差別を自ら体験しているし、またフランスの植民地支配の下でアルジェリア人がうけている差別を日々目撃していたために、そのような西欧の文化・社会を批判し、そういう社会・文化の担い手であった西欧人男性を批判しているのであるが、そのときにフロイト理論を借りて、西欧の男性が子供のときから去勢恐怖を抱いて大人になるような西欧社会のあり方を、女性

の立場から、差別を受けたものの立場から批判したのである。

女性の立場から西欧社会を批判したという点、エレヌ・シクスーより 30 年近く前の女性思想家、シモーヌ・ド・ボーヴォワールがすぐに思い出される。彼女は『第二の性』の第一部“女はどう育てられるか”の中で、5～6 歳ごろの第二離乳期において、女兒は可愛がられ続け、“母親のスカートにまとわりついても許される”のに対し、男児は親からの“キスや愛撫が少しずつ拒否されていき”、“小さな男の大人”になるように求められ、親から独立することで、大人から認められるようになる。男児と女兒の育てられ方の違いについて述べている。<sup>1)</sup> 西欧社会においては、このように自立した個人になることが重要とされるが、男性中心社会でもあるので、男児に対してその要請が強くなるのである。したがって日本とは違って、男児は早くから一人で寝るように、個室の中で寝かせられる。西欧では男児に対し、女兒より、より早期に母親から自立するという厳しい態度を要求するのだが、その理由は、男児は女兒より“それだけ優れている”<sup>2)</sup> からだということになる。

彼の進む道は困難だと勇気づけながら、男らしさの誇りを吹き込まれるのである。この男らしさという抽象的概念は、男の子にとって具体的な姿をおびてくる。それがペニスに具象化されるからだ。男の子が自分の無気力で小さな性器に誇りを感じるのは周囲の態度をとおしてであって、自発的にではない。母親や乳母たちが男根と雄の概念を同一視する伝統を永続させているのである。<sup>3)</sup>

男児が自立した個人になるためには、まずペニスに誇りを持たねばならない、誇りを持つことから自立した大人への道が始まるという西欧男性のあり方を、ボーヴォワールは述べているのである。

フロイトによれば、ペニスのない女兒を見て、男児は去勢されることがあるという恐怖に捉えられることになる。母といつまでも一緒にいると父に去勢されるかもしれないという恐怖心を持つようになる。生まれたときからずっと母と一緒にいて母が愛の対象であり、父がライバルであった男児は、この第二離乳期において、去勢不安ゆえに母への愛を断念し、すでに自立した立派な個人の父と一体化しようとする。こうして男児は、<母と離れ、自立した主体になれ>という命令、<法>を学ぶことになる。“母親は、父親の名において、父親をとおして、命令したり、ほめたり、罰を与える”<sup>4)</sup> ので、“父の名”におい

て子供は法を学ぶ。父こそ偉大で権威を持っている者であることを学ぶのである。

この“法を学ぶ”ということの内面化、これが超自我の発達といわれるものである。超自我というのは、人間の心を構成している3つの要素の一つであり、3つの要素とは自我とイドあるいはエスと呼ばれているものと、この超自我である。イドあるいはエスと呼ばれているものは、性欲衝動に支配されている無意識のことである。さてでは超自我とは何か？これは自我から分化発達し、社会が持っている価値基準を取り入れ、社会が決められている行動基準によって自我を監視し、欲動（心的エネルギー）に対して検閲的態度を取るもののことである。もう少し簡単に言ってしまうと、心の内なる検察官や裁判官みたいなもので、そんなことはしてはいけないとか、していいとかいう判断を下すものである。超自我の働きによって、男児たるもの、お母さんにいつまでも甘えていてはいけない、早くお母さんから独立して、一人前の大人にならねばならないと、自分で自分に言い聞かせるようになるわけである。この自分で自分に言い聞かせる、これが超自我である。男児は去勢恐怖から、超自我を発達させ、一人前の大人になっていくというのが、西欧男性に対してフロイトが行った精神分析であった。去勢恐怖の結果、立派な自立した大人になるというのだから、去勢恐怖が大きな力になっていることがわかる。

一方、女兒にはペニスがない。男児が優れているとみなされる社会にあっては、女兒の目にはペニスがその優秀さや特権の象徴・理由に見えるとフロイトは言っている。だから女兒もペニスを欲しいと思うようになるとフロイトは言うのである。いわゆる“ペニス羨望”がこれにあたる。女兒にペニスがないのは、去勢されたからか？女兒はペニスを父によって切除されたというよりは、ペニスをくれなかった母を恨み、父を愛するようになるとフロイトは主張した。母親は誕生以来愛の対象であったのに、自分にペニスを与えられていないことを発見すると、愛の対象をペニスをくれなかった母から、ペニスをくれるかもしれない父へと移行していくというのである。どうして父がペニスをくれるかもしれないと考えるのかについてフロイトは十分に説明してくれていないが、ペニスを与えられないとしても、父の子を産みたいと思うようになる、子供はペニスの代替物になるというのが、フロイトが女兒の精神分析の結果として提示したものであった。子供を持つことによって、母として女性は力を振るうことができるわけだ。一方、また男児にとっては、いつまでも母親にまわりつ

いていれば一人前になれないということで、母親とは“おぞましい”ものだという考えを持つようになる。つまり女性は母になって子供に権力を及ぼそうとするけれども、それはあくまで父の名による権威、つまり父の威光を後ろ盾にした権威であり、他方、子供特に息子は母から早く独立しようとする、このような矛盾した関係が両者の間に成立することになる。母と息子の関係、女性と男性の関係がここに語られてはいるが、母と娘の関係は欠落している。そして母と息子、男と女の関係においても、いつでも男性中心に、男性優位なものとして関係が語られていることがわかる。女性と男性は、西欧では、母から独立するとき、半ば敵対関係にいるといっても過言ではない。

ところで、女兒にはペニスがないために、去勢されるということがない。“欠如の欠如”、つまり“去勢される＝ペニスが欠如する”ということに欠如している>ということになる。したがって、去勢恐怖がないために、男児ほど超自我を発達させることができないというのが、フロイトの見解であった。超自我が十分に発達しないということは、何がよいことで、何をしてはいけないか、という判断力が、十分には発達しないということになる。自立した個人にはなれないということである。したがって、男性が女性に、どのように行動すべきか、何を欲望すべきか、教えてやることになるというのである。男性が常に女性の上位にいて、よりすぐれていると考えられている。このように、フロイトの創始した精神分析では、自立した個人になる、ならない（なれない）ということが、男性も女性もペニスを中心に考えられていることがわかる。つまり女性は、自立するとき、間接的にしかなれないのである。男性をとおして、男性に教えてもらい、男性の真似をしなければ、自立できないのである。子供を生んでも、子供の背後にいる個人としてしか生きられないので、その子がさらに自立するとき、父の名を通して、この自立を阻もうとするようになるのである。

## II. 人間の翻訳

さて以上のようなフロイトの男性像・女性像は、フロイトの生きていた 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての西欧の男性・女性に当てはまる分析である。換言するなら、当時の西欧男性というテキストを“翻訳”すれば、フロイトが述べたように翻訳されるということであり、当時の家父長的社会に育った男性が女性を見れば、フロイトが言っているような“翻訳”、女性というテキストの翻訳が成立するということである。

男性というテキスト、女性というテキスト、そしてその翻訳という言い方をしたのは、石沢誠一という人が1996年に書いた、『翻訳としての人間』<sup>5)</sup>という本をもじってのことである。この本は、フロイトと、フロイトを受け継いで精神分析を発展させたラカンというフランスの精神分析学者の理論を論じた優れた本であるが、ここで“翻訳”という言葉をもどのような意味で使っているかを少し考えて見よう。翻訳というと、普通、英語やフランス語を日本語の単語に置き換えることだと思いがちだが、そう簡単ではない。たとえば、『吾輩は猫である』という夏目漱石の本のタイトルの吾輩という言葉は、英語にもフランス語にも翻訳できない。日本語には、わたし、わたくし、俺、僕、あたし、などいろいろな言い方があるが、英語では唯一つ I しかないし、フランス語でも je という言い方一つしかない。日本語の吾輩という語の持つ尊大なニュアンスは、英語やフランス語では出せないのである。

それから、一つのテキストを翻訳するには、実際には、さまざまな解釈が成り立ちうる。他の言語へ移し変えるということは、一つの文化から、他の異なる文化へと移し変えることでもあり、翻訳できないという事態も起こりえる。また、場合によっては、誤解・誤訳することもありえる。以前、フランスにいたときに、大屋政子のドキュメンタリーをテレビで見たことがある。インタビュー場面で、大屋政子は亡くなった夫のことを、お父ちゃんと呼んでいた。それが、フランス語では、夫と訳さなければならないのに、まさに文字通り、父と訳されていた。フランス語では、夫のことを、日本のように、お父ちゃんと呼ぶことは、絶対がない。翻訳したフランス人が、そのことに気づかないで、父と、誤訳してしまったのである。フランスの文化から抜け出すことなく翻訳したので、誤訳になったのである。

“お父ちゃん”という語が父親ではなく夫であると解釈しなければならないように、翻訳するとは、解釈することであるということが、分かる。だから、誰かについて書くことも、一つの翻訳と考えることができる。誰か一人の人を選べば、その人が一つのテキストになるのである。テキストというとき、普通は原稿を指している。原稿を読み、そこに何が書いてあったかを解釈する作業が、読書という作業、読解という作業である。人を一つのテキストとみなすなら、ある人について、どう考えるかという解釈は、一つの翻訳をしていることに匹敵する。例をあげるなら、こういうことである。NHK 教育テレビのイタリア語講師のジローラモというイタリア人男性は、毎日、母親に電話をしている

のだそうだ。また、あるテレビ番組を見ていたら、タイ人と結婚した日本人女性が、“私の夫はマザコンです”と紹介していた。タイ人夫は、毎日母親に電話しているし、タイに帰国すれば母親と手をつないで買い物に行くからである。イタリア人男性というテキスト、タイ人男性というテキストを日本語に翻訳(つまり解釈)すれば、マザコンということになる。しかし、イタリア語、タイ語でそれらのテキストを読めば、マザコンとはどこにも書いてなくて、親孝行息子、あるべき息子の姿と書いてあるわけで、マザコンと訳すのは誤訳だということになる。

このように考えるなら、フロイトでさえ、当時の西欧の人間を翻訳しただけだといえるだろう。フロイトの言う去勢恐怖は、西欧人男性というテキストの一つの翻訳だということができるわけである。しかもその当時の文化から抜け出ることなく行った翻訳だといえるのである。テキストが日本人男性、日本人女性なら、ペニスを中心にしたフロイトの解釈は誤訳になる可能性があるのではないだろうか。日本人男性というテキストに、去勢恐怖が書かれているのか、かなり疑問に思えるのである。西欧では去勢恐怖から超自我を形成し、さらに強固な自我を作ることが“法”を作ることにつながり、権力を持つことにつながるが、日本は自我の明確な人間になることが大事だとは考えない社会であるし、したがって、男児も母親から早期に引き離されることなく、遅くは中学に入るころまで、母親と同室で就寝する場合も多々あるからである。私はよく名大生に、何歳ぐらいまで母親と一緒に同じ部屋で寝ていたのかと聞くのだが、中学に入るころまで一緒だったと答える学生が必ず3~4クラスで1人ぐらいはいる。西欧では考えられないことである。フロイトの書いているテキストは、したがって、日本人男性というテキストの翻訳としては誤訳だという可能性が高いように思える。この点に関しては、後でもう一度、きちんと考えてみる。

さて西欧に戻ると、ボーヴォワールは『第二の性』においてそれほどフロイトに反対していないが、現代の西欧のフェミニストたちは、フロイトのこの女性というテキストの“翻訳”に対して、誤訳だとかみついたのである。ちょっと、ちょっと、フロイトさん、女性というテキストのどこにペニス羨望だの、子供はペニスの代替物だと書いてあるの？そんなことちっとも書いてないわ。女性というテキストに書いてあることをきちんと読まないで、あるいは読んでも良くわからなかったから、あなたが勝手な文章をでっち上げたんでしょ。あなたが書いたものは完全な誤訳ですよ、というわけである。またフロイトが、

母と娘の関係についても言及しなかった点を、女性たちは批判した。

男性というテキスト、女性というテキストのフロイトが行った“翻訳”は、すでに述べたように、男児が去勢恐怖から、超自我を発達させて、一人前の大人になるのに対して、女兒はペニスがないために、去勢恐怖がなく、そのために超自我の発達が弱く、一人前の大人になれないというものであった。つまりここで、ペニスに大きな比重が置かれていたわけだが、なぜペニスがそれほど重大かという、それはペニスがファロスになるからである。ファロスとは、勃起した状態のペニスのことであるのは言うまでもない。つまり、大きく、太く、硬くなっているので、ファロスは、力の、権力の象徴となるのである。言い方を変えるなら、ペニスに権力をプラスしたもの、それがファロスである。ただペニスが勃起したというだけではなく、権力と結びつくことで、ファロスといわれるものになっているのである。ペニスがファロスとして翻訳されたともいえるだろう。

### III. 西欧世界における二項対立

去勢されるということは、ファロスを持ちえない、つまり権力を持ってないということを意味する。去勢恐怖とは、単に身体的に切り取られる恐怖のみではなく、権力までも奪われてしまう恐怖だということである。だから去勢は、男性にとっては、少なくとも西欧の男性にとっては、恐怖なのである。ペニスがあるかないかということは、結局は、権力を持てるか持てないかということなのである。男性はペニスがあるから、権力を持てるのに対して、女性はペニスがないから、権力を持ってないのである。

西欧世界は、このように、ファロスを持つものの側と持たないものの側に分かれている。権力を持っている男性は男根中心主義の文化を形成し支配している。つまり西欧世界は、対になった対立項、二つの言葉でできた体系から成立している。男／女に代表される、権力を持つ側と持たない側という二項は、他のすべての<sup>カップル</sup>二項 — 能動性／受動性、太陽／月、文化／自然、精神／物質、昼／夜、頭脳／感情、等々 — に結びついている。それは互いに対立し、序列のある二項である。日本はこれほどまでの対立項を作ってきた国ではないことがわかる。“原始女性は太陽であった”と平塚らいてうが言ったように、女性と太陽がむすびつけられた文化であり、西欧流の対立は結びつかない。西歐的二項対立の成立とは、平等な対関係の破壊と、闘いの開始を意味する。勝利者は常

に同じ人であり、男性である。あらゆる言説を統御し、再生産している文化・西欧哲学は、この対立項によって秩序付けられ、特徴付けられている。このようにヒエラルキー化されたカップルを通して構築された神話、伝記、書物、哲学体系、つまり西欧の文化全体が男根中心的に成立しているのである。換言するなら西欧の文化とは、男女を基礎とする二項対立に物事を当てはめて思考し、二項のうちの一項が他項より、より優れているとするものである。少なくとも20世紀までは、確実にそうであった。

シクスーはそのことを批判した急先鋒の一人であった。シクスーはアルジェリアがフランスの植民地であった時代に、アルジェリアで生まれ育った人なので、男女の問題より、二項対立が西欧と非西欧の対立であることを、先に見てしまったのだった。彼女は当時のアルジェリアを次のように表現している。

〔彼ら（＝水夫）は〕タバコ屋をしていた私の叔母の家に行きました。（略）その正面にはその名前、《二つの世界で》がありました。このように店は、私もろとも、二つの世界の宇宙に献呈されていました。（略）世界は二つでした。すべての世界は二つで、いつでも初めに二つありました。多くの二つの世界がありました。<sup>6)</sup>

シクスーは二項対立を男女に結びつけ、男女というカップルを基礎にした序列のある二項、<sup>カップル</sup>こういう二項対立で西欧文化が成立していることを語っているわけである。二項対立の社会では、権力側は非権力側を自分たちとは異質なものとして、排除しようとする。しかし完全に排除してしまつては、二項対立が成立しなくなるので、軽蔑・抑圧・搾取の対象にする。

この序列化された二項対立文化の中で、下位を占めるアルジェリア人について、シクスーは次のように書いている。

フランス人のコーラスが一つの声となって、アラブ人は不潔で怠惰で盗人で役立つはずだと言いついていました。<sup>7)</sup>

社会はこのように二つの序列化された世界に分かれ、それが暴力によって維持されている。一方で飢えや困窮状態にいる人たちがいて、他方で飽食し、力をもてあそび、他方を収奪・抑圧する人たちがいるということになる。二者は必ず必要なのである。なぜなら、奴隷なくして主人はありえず、搾取なくして経済・政治力の蓄積はなく、家畜のように働く人々なくして支配階級は成立せ

ず、植民地のアラブ人なくしてフランス人はなく、ユダヤ人なくしてナチズム、排除なしに所有はありえないからである。<sup>8)</sup> そうして、フランス人のコーラスがアルジェリア人を不潔で怠惰で盗人で役立たずだと言い放っていたように、ファロスの側が、非ファロスの側を脅かし、二者の対立において善とは、ファロスを持つ側にとっての善であり、その善を脅かすものが悪の側だと、一方的に規定されるのである。

先ほど、二項対立は少なくとも 20 世紀までは明確だといった。男女に関しては、男性が善で、女性が悪であるというのは消えたが、西欧／非西欧に関しては、これが善／悪であると断定した人が現代にもいた。イラク戦争開始直前のブッシュ大統領の発言が、このことを如実に語っているように思える。彼はイラクを悪の枢軸と断定し、善の側につくのか、悪の側につくのかと世界の人々に迫り、小泉首相は“善”の側についた。またブッシュは、自分たちに味方するものはテロリストではない。自分たちに反対する者はテロリストだと断定した。テロの味方ではないが、アメリカの軍事作戦にも賛成しないという、いわば中間地帯を彼は認めない。自分たちに反対する者はテロリストだと一方的に“判断し、命名し”、そして“テロリスト”との戦いのために資金援助や軍隊派遣、ブーツ・オン・ザ・グラウンドという“役割分担”を求めたのである。ファロスの側が、あくまで文化や社会のあり方を決めているのである。善とはあくまでブッシュにとっての善でしかない。

権力を持つ側、つまり“男性が一般的、強制的に、判断し、診断し、要約し、命名しようとしてくる”<sup>9)</sup> のに対し、権力を持たない側は、“馴致され、奪われ、破壊されるためだけに存在”<sup>10)</sup> するということである。序列化された<sup>カップル</sup>二項にあっては、一方はそれ自体としては、つまり差異ある者がその差異を丸ごともらった価値ある者としては認められず、常に序列の下位を占める者の位置のみをあてがわれるということになる。世界の南北問題が、フェミニストたちの中で、象徴的に男女問題として語られるのもそのためである。北の世界は男性の位置を、南は女性の位置を占めるのである。

西欧世界全体がこのような男根中心主義でできていることを解明し、それに異議申し立てをしたのが、1960 年代後半から 70 年代初頭にかけての時期の女性解放論者たちであった。その中にエレヌ・シクスーも入っている。シクスーは、西欧男性に関するフロイト理論は認めているようだが、女性に関する理論には異議を唱えているのである。もちろん今日の世界は、西欧が植民地を持

っていたような時代とは違って、もっと民主的になっていると考えられるし、女性の地位ももっと向上していることは事実である。しかし一昔前まで、そして現在でも一部分では、このような分析が有効であるということはいえるであろう。

#### IV. 日本における陽物<sup>11)</sup>の意味するもの

ここまでは去勢恐怖の問題を発展させ、それを権力の問題に結びつけ、男女の対立、西欧／非西欧の対立としてみてきた。

それでは日本からはこういった問題はどうか見えるだろうか。日本は西欧から見れば、非西欧に入っているが、明治以来、福沢諭吉が言ったように脱亜入欧のスローガンを掲げ、非西欧から出て西欧の仲間入りをする道を進んできた。一時南アフリカが日本人を名誉白人と呼んでいたのを記憶している人々もいることだろう。現在の日本も西欧寄り、非西欧に自らを位置づけしようとしなないといっても過言ではない。しかしこれは政治問題なので、本題に戻って、去勢恐怖の問題が日本人にも在るかないかを考えてみよう。換言するなら、日本では性器はどのように翻訳されているのだろうか。どのような翻訳の仕方があるのだろうか。これからは民俗学の視点にたってみてみたいと思う。

日本でも性器崇拝が行われている。たとえば、愛知県小牧市の田縣神社に“豊年祭”と呼ばれる祭りがある。男性器（陽物）をかたどった木彫りの“大男莖形”と呼ばれる特大の陽物を神輿に担いで、神明社と呼ばれる神社から田縣神社の本殿まで行列していき、この陽物を奉納するという祭りである。田縣神社はスサノオノミコトの孫で、大歳神おとしのかみの子の、穀物の守護神である御歳神みとしのかみと、尾張地方開拓の祖神といわれる大荒田命の娘の玉姫命を祀る神社である。<sup>12)</sup> 807年に書かれた『古語拾遺』の「御歳神」の項に、“大地主神が田を営る日に、農夫に牛肉を食べさせた。その時、御歳神の子がその田にゆき、饗物そなえものに唾をはきかけ父に報告した。御歳神は怒って田にオオネムシ（稲の害虫）を放って枯らしてしまった。大地主神がその理由を占わせ、御歳神の祟りと判り、白猪・白馬・白鶏を献じて謝した。御歳神が牛肉を溝口に置き、男根形のものを作ってそれに加え、胡桃の葉や塩等を畔に置くと、苗葉は復活し、稲は豊作となった”<sup>13)</sup> という内容が記載されていて、男莖形を奉納して五穀豊穰を祈願する風習が古代にはすでにあつたことがわかる。御歳神は、“歳”が穀物、特に稲を意味することから、農耕神として広く信仰されている。他方、玉姫は、建稲種命たけいなだねのみことと結婚

したが、夫の死後子供と共に父の大荒田の元で、尾張地方の開拓に尽力したとされる。死後、その功績をたたえて御歳神と合祀されたのである。

豊年祭の行列はまず、清めの塩をまく塩まき、錫杖、猿田彦（日本神話で、天孫<sup>てんそん</sup>降臨の際、先頭に立って道案内し、のち、五十鈴川に鎮座したという神）、そして御前神輿が続く。御前神輿（玉姫の夫である建稲種命を乗せた神輿）に、大男茎形を乗せた神輿が続く。神輿を担いでいる若者は、大声で、“大陰核！<sup>おおへのこ</sup> 懸<sup>あがた</sup>の森の大陰核！”と叫ぶ。“陰核”とは、広辞苑によれば、①辜丸②陰茎の両方の意味があるが、ここでは当然後者の意味、それも陽物の意味で使われているのは明白である。田縣神社の豊年祭は、別名、陰核祭とも称されている。御前神輿、大男茎形の神輿に続いて、最近できたらしいが、御歳神が乗った神輿が引っ張られる。さらには大榊<sup>さかさき</sup>、男性器を描いた大幟<sup>のぼり</sup>、小陽物を抱えた厄年の女性、など、総勢 1500 名ほどの行列だそうだ。<sup>14)</sup>

これらの神輿は、神明社（一年交代で熊野社）から出発し、田縣神社へと向かうのである。神明社には男性神（建稲種命）を祀り、田縣神社に女性神（玉姫命）を祀っている。この豊年祭は、夫をなくした玉姫を喜ばせるために、夫を模った人形と夫のものとされる陽物を、神明社から田縣神社まで行列させるのだといわれている。<sup>15)</sup> 田縣神社は、もともとは女陰で象徴されていたともいわれている。<sup>16)</sup> つまり、神社は、陽物というより、生命力としての大地崇拝をする場であったということである。

重要なことは、K.NUMAZAWA が指摘しているとおり、表面的には男根崇拝なのだが、実際には、田んぼの女神の崇拝、つまり五穀豊穰祈願だということである。この女神の存在なくしては、陽物はその存在意義を喪失するのである。<sup>17)</sup> そして、神明社（または熊野社）から出た建稲種命が田縣神社を訪れるということは、古代の妻問い婚を象徴しているといえるのである。<sup>18)</sup> 大地の守り神の女神と男性神との結婚が、玉姫の子沢山に通じる五穀豊穰を象徴することになるのである。西欧のファロスが表していたような“権力”はここにはない。陽物はあくまで女陰と対等であり、両者は協力して豊穰をもたらすのである。

NUMAZAWA は、豊年祭の特徴として、①巨大な陽物を運ぶこと、②行列が“懸<sup>あがた</sup>の森の大陰核”という決まり文句を叫ぶこと、③行列を見ている村人たちの大笑い、の 3 つを挙げている。<sup>19)</sup> 決まり文句は、玉姫命に、夫が彼の陽物と共に彼女を訪れるよという、前触れ、注意喚起と考えてよいだろう。そして村人たちの大笑いは、言うまでもなく、陽物を馬鹿にしての笑いではない。これ

は、新婚者たちへのからかいの笑いに通じるものであろう。いずれにしろ、西欧のファロスは権力の象徴であるので、ファロスを見て“笑う”ということはありませんが、日本の陽物にはファロスの持つ“権力”という要素がないことが、この“笑い”からも読み取れるのである。

この田縣神社の豊年祭の神事は1千年以上続いているそうだ。長く農業国であったわが国にあっては、五穀豊穡が最大の関心事であった。種蒔き前のこの祭りは、田畑を女性に見立て、男性が種付けをして、五穀豊穡を願うという意味を持っている。だから豊年祭と呼ばれるのである。他方、西欧では女陰を象徴するようなことは一つもないと断言できる。また日本では女陰と陽物の間には、西欧におけるような力の優劣差がなく、二つが対等であることを示している。したがって陽物は日本では決して権力の象徴ではなく、女陰と二つ合わさって生殖と豊穡の象徴となっているのである。陽物と女陰が象徴する力とは自立の力でも権力と結びついた力でもなく、あくまで豊穡と生殖の力なのである。

茨城県にある高道祖神社たかさいにも、多くの陽物を模した石などがまつられている。しかしこの神社の主な行事は子授かりの祈祷と追な（節分）の豆まきで、社務所では女陰と陽物を模した“しん粉（白米を日光で乾かし、臼でひいて粉にしたもの）餅”を買うことができる。女陰と陽物がセットになって売られている。安いものから大きくて高価なものまで、数種類売られているそうだ。男性は女陰を模した餅を食べ、女性は陽物を模した餅を食べる。食べた瞬間に生殖行為の象徴となる。男女が交わるということ、餅を食べることで象徴的に行い、豊年を祈るのである。<sup>20)</sup> このように、陽物と女陰は必ずセットで融合していて、優劣の関係にならない。分離にならないのである。あくまで生殖・豊穡の象徴である。西欧と同じようにカップルとして物事を捉えるとしても、優劣や対立の関係性ではない。日本では、陽物のみを祀るとか、陽物は女陰より優れているとされることはないのである。陽物、女陰という言葉からもわかるように、そこには陰陽思想の影響があるが、陰陽の考え方においては、どちらかがより重要な比重を占めてはいけないのである。したがって男女はあくまで対等である。

陽物と女陰が対等であることは、『古事記』からも読み取ることができる。イザナキとイザナミの有名な問答、

「汝なむちが身は、如何いかにか成れる」といひしに、答えてまを白ししく、「吾あが身は、成り

成りて成り合ところひとところぬ処一処在り」とまをしき。爾しかくして、伊耶那岐命いざなぎのみことの詔のりたまひしく、「我が身あは、成り成りて成り余れる処一処在り。故かれ、此の吾が身の成り余れる処を以て、汝が身の成り合さぬ処を刺し塞ふさぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むは、奈何いかに」とのりたまひしに、伊耶那美命の答へて曰ひしく、「然しか、善し」といひき。<sup>21)</sup>

イザナキは“成り余れる”、つまり“過剰”だといひ、イザナミは“成り合ぬ”、つまり“不足”していると、それぞれの“身”（神野志によれば、性にかかわるもの）について述べている。何が基準（あるいは標準）であるかはわからないが、一方は過剰、他方は不足として、いずれも基準（あるいは標準）から“逸脱”していると捉えているのである。おそらく、基準なり標準となる性（器）があるとするなら、それは、男性でも女性でもない中性として考えられているのであろう。子産みを行わないイザナギ・イザナミ以前の神々は、子産みを行わない限りにおいてペアーである必要はないので、実際一柱で生まれている。これら神々には“身”がないのである。“身”がないとは、換言するなら中性であり、これが逆に、“標準”あるいは“基準”の性とも考えられるのである。したがって、男性と女性の性差をもたらすためには、どちらもが、中性からの“逸脱”でなければならないのである。ならば当然それは、一方が“過剰”になり、他方が“不足”にならざるを得ない。しかしそれは陰陽思想において陽が陰より優秀でないのと同様、“過剰”が“不足”より、優秀であるとはならないし、西欧のように、男性性器を基準として、女性性器をペニスの“欠如”とも捉えないのである。古代の日本人は、大変民主的に性を捉えていたといえるのである。また、子産み（国産み）においても、イザナギとイザナミは合議によっていて、両者は民主的で対等の関係を結んでいるといえる。

## V. 結論

西欧世界ではファロスは権力の象徴だから、それと戯れることはない。しかし田縣神社で“大男莖形”<sup>おおおわせがた</sup>が神明社で出番を待つ間、幼児を陽物の上に座らせたり、頬ずりする見物の外国人女性がいたり、男性が沿道の女性人客に手持ち用の男莖形を触らせたりして、楽しんでいる。<sup>22)</sup> 以上のようなことから、女性性器はそのまま男性性器とセットになって受け入れられているのであって、どうも日本では去勢恐怖を持たなくていい文化であることが、なんとなく分か

ってくるのではないだろうか。陽物には西欧におけるような力や権威といった意味は付与されていず、したがって、男性にも去勢恐怖がないのではないだろうか。フロイトを受け継いだラカンが日本に来たときに、日本人に精神分析は必要ないといったのは、そのような意味においてであろう。“ペニス羨望”といったフロイトの西欧人女性に関する“翻訳”が日本人女性というテキストの翻訳としては誤訳であるのはもちろん、西欧人男性に関するフロイトの説も、日本人男性というテキストの翻訳としては誤訳だといえることは、わかるだろう。

明治以降、脱亜入欧で日本人も変化してきたことは事実である。去勢恐怖を精神分析の観点から述べたが、日本では民俗学で考えざるを得なかった。なぜかといえば、明治時代に精神分析も日本に紹介されているが、問題は、精神分析理論においても、治療の分野においても、日本人にあった理論が作り出されていないからである。確かに森田療法や、古沢平作らはいしたが、マイナーな存在に留まっていて、きちんと日本人の精神分析といえるところまでは至っていない。性欲そのものも、無意識の、日本人を行動に駆り立てる最も重要なファクターであるかどうかさえ、研究されていない。もちろん日本人の心の奥底に、何らかの力がないかといえば、必ずやあると思うのだが、それが性欲かどうかは未知である。しかし西欧を越える何かがあるのかどうか、調べることに意味がある。何かがあれば、二項対立的西欧世界を超える何かのヒントを見出せるかもしれないからである。もしフロイトやラカンが日本の豊年祭を見ていたら、陽物が豊穡の象徴であって、権力ではないと知ったら、どう思っただろうか。西欧文化絶対の時代に生きた 19 世紀末から 20 世紀初頭のフロイトなら、無視しただろう。しかしこの 21 世紀初頭にフロイトが生きていて、非西欧からも西欧は学ばなければならないと思うなら、フロイトは去勢恐怖という理論に修正を加える必要性を感じたかもしれない。シクスーがフロイトに対して行った批判を、先取りする形で、フロイトは晩年に意識していたようである。つまり“女性はいったい何を望んでいるのか”という、有名な問いに対して、“女性は何にも望んでいない。したがって、男性が女性に何を望むべきか教えてあげる”というその答えをシクスーは問題にしているのであるが<sup>23)</sup>、この問いはフロイトが、彼の理論が女性には会わないことをうすうす感じ取っていたことをあらわしているのではないだろうか。

筆者はここ数年、日本の男女関係、個人が自立するファクター、といった点を、陰陽思想や、仏教を援用しながら、日仏比較を行っている。西欧と日本の

個人の捉え方、つまり翻訳のし直しを行おうとしているのである。日本で男女が平等だったわけではなく、男性優位社会であったことも事実なのだが、同じように男女が不平等だといっても、日本における男女関係は、西欧とはまったく別の分析を必要とするであろうということである。

## 注

- 1) シモーヌ・ド・ボーヴォワール著、『第二の性』を原文で読み直す会訳『決定版、第二の性』、II 体験 [上] p.1、新潮文庫、平成 13 年
- 2) 同上、p.18
- 3) 同上、p.18
- 4) 同上、p.47
- 5) 石沢誠一『翻訳としての人間』平凡社、1996
- 6) エレーヌ・シクスー著、松本伊瑛子訳「私のアルジェリアンス」、『現代思想』p.245、1997 年 12 月号
- 7) 同上、p.237
- 8) エレーヌ・シクスー著、松本・国領・藤倉編訳『メデューサの笑い』、p.114、紀伊国屋書店、1993
- 9) 同上、p.71
- 10) 同上、p.114
- 11) ファロスと陽物は実際には同じものを指しているが、西欧と日本ではその意味合い、象徴的機能が異なっている（というのが、本論のテーマである）ので、西欧におけるものはファロス、日本におけるものは陽物という言葉を用いて、その差異を表すことにする。
- 12) 「シリーズ日本の祭り⑩愛知県、<sup>たがた</sup>田縣神社<sup>ほうねんまつり</sup>豊年祭」、*Medical News*, No.346、大日本製薬、p.18、1996。この資料は田縣神社の神主の栗田孝浩氏が筆者に送ってくださったものである。ここで改めて謝意を表す。
- 13) 斎部広成撰、西宮一民校注『古語拾遺』pp.193-194、岩波文庫、1985。引用に際し、若干の省略・加筆を行った。
- 14) 田縣神社の神主、栗田孝浩氏との電話インタビューによる。
- 15) Kiichi NUMAZAWA, *The Fertility Festival at Tagata Shinto Shrine, Aichi Prefecture, Japan*, *ACTA TROPICA*, Vol.16, Nr.3, p.212, 1959。この資料も田縣神社神主の栗田孝浩氏が筆者に送ってくださったものである。

- 16) Ibid. p.197
- 17) Ibid. p.213
- 18) Ibid. p.213, p.214.
- 19) Ibid. pp.199-200.
- 20) 高道祖神社神主との電話インタビューによる。
- 21) 神野志隆光『古事記と日本書紀』、p.58、講談社現代新書、1999
- 22) 岡村直樹『陰陽二つの性器崇拜 — 豊年祭 — 』と題するページに、女性が大男茎形の上に赤ん坊を載せている写真がある。[http://dokaikyo.or.jp/yomimono/maturi/245\\_mtr.pdf](http://dokaikyo.or.jp/yomimono/maturi/245_mtr.pdf) また、<http://www4.plala.or.jp/igasaki/carnival/hounen2/hounen2.htm> にも男根を抱きかかえたり、笑ったりしている観光客の写真が掲載されている。
- 23) エレーヌ・シクスー『メデューサの笑い』、pp.57-58

## 参考文献

- ラプランシュ/ポンタリス著、村上仁監訳『精神分析用語辞典』、みすず書房、1977  
鈴木大拙『東洋的な見方』岩波文庫、1997